弘法大師信仰・伝説と高野街道について（一）

―東高野街道編

田村宗英

一、はじめに

筆者は、平成二十八年（二〇一六年）より『生きる力SHINGON』（真言宗智山派宗務庁発行）において「お大師さまとご信仰」という連載を担当しており、日本各地に存在する弘法大師信仰や伝説について取材を進めている。当初は、弘法大師と水をテーマにして、弘法大師がここへやって来て錫杖で地面を突くと水が湧出した…というような伝説がある場所を調べ、ゆかりのある寺院や祭礼などを行っている地域・団体を選定して取材を行ってきた。[1] その中で、特に弘法大師信仰ならびに伝説が集中している場所があると気付いた。しかし、伝説や言い伝えなのだから明確な裏付けをとることは難しいであろうし、偶然かもしれないと考えること自体をやめてしまっていた。その後、平成二十九年（二〇一七年）に大阪府四條畷市にある「照湧大井戸（てるわきおおいど）」を取材し、講演会に参加した際、弘法大師信仰・伝説が集中している場所は偶然ではなく「街道」とのつながりによっていると教

えて頂いた。この講演会においては、主に「東高野街道」沿いにある弘法大師伝説について解説いただいたのであるが、自身でも調べを進めていくと「高野街道」沿いには多くの伝説が残されていることがわかった。街道沿いの地域に居住されている方々にとっては自明のことであるのかもしれないが、伝説と思っていたものが現実に存在する街道と関連することに驚きとともに興味がわき、断続的ではあるが取材を続けている。

また、信仰や伝説を扱う際、文献等で裏付けを取ることができないため、大変難しいテーマであると認識しているが、あくまで弘法大師に対する信仰と伝説が現在にまで受け継がれている一つの証を示しておきたいという思いがあり、今回論文としてまとめることにした。本稿においては、『生きる力SHINGON』での取材と原稿を下地としつつ、掲載できなかった内容や取材後の状況も含めて紹介していきたい。また今回は、高野街道の中でも「東高野街道」沿いにある弘法大師信仰・伝説について報告する。

二、高野街道について

平安時代中期頃から、弘法大師を慕う人々が高野山に参詣する「高野詣（こうやもうで）」が行われるようになった。多くの貴族や皇族が高野山を目指し、参詣の様子を日記に書き残している。それらの日記から参詣の道筋をたどると、当初は京都から奈良盆地を経て、高野山に至る大和路がつかわれていたようである。また、長承元年（一一三二年）に鳥羽上皇によって初めて、天王寺から高野山に向かう河内路を使った高野詣が行われ、その後、後白河上皇などもこの道筋を通ったとされる。[2]

高野街道には、東高野街道、西高野街道、中高野街道、下高野街道という四つのルートがある。江戸時代に入ると、幕府は全国の道を整備し、高野街道もその際に三日市宿（大阪府河内長野市）が設置されるなど整備が進

められた。高野街道という呼び方について、江戸時代には、主に高野道（こうやみち）と呼ばれていたそうだが、明治時代以降に名称が整理され、東や西が付けられて現在のような呼称になったとされる。

［東高野街道］

東高野街道は、京道や紀伊道とも呼ばれ、大阪府内では最長の縦貫街道である。現在の国道一七〇号、三七一号に沿っている。石清水八幡宮（京都府八幡市）を起点として洞ヶ峠（ほらがとうげ）（京都府と大阪府の境）を越え、生駒山西麓を南下し、現在の枚方市、交野市、寝屋川市、四條畷市、大東市、東大阪市、八尾市、柏原市、藤井寺市、羽曳野市、富田林市を経て、河内長野市長野町で西高野街道と合流し、全長は約五十五kmに及ぶ。京都から河内方面へ南北に延びる数少ない道であることから、高野詣が行われる前から人の通行や物資の運搬のための重要な道であったと考えられている。

また、律令時代の官道（国が計画して整備した道）である南海道が後の東高野街道になったとの指摘もある。さらに、東高野街道の発展は高野聖の活動とも関連しているとされる。高野聖とは、高野山を本拠として全国的に勧進遊行した僧を指し、特に鎌倉時代以後は、諸国をまわる中で高野山への納骨をすすめるとともに、弘法大師信仰と霊験譚を広めたとされ、その高野聖が、高野山と諸国との往復において利用したのが東高野街道だったという。(3)

［西高野街道］

西高野街道は、大阪府堺市にある大小路橋（おおしょうじ）を起点とし、大阪狭山市を経て河内長野市楠町で中高野街道と合

流する全長約十八kmの道である。中世の皇族や貴族が京都から淀川を下って大山崎や大阪の天満橋に上陸して四天王寺や住吉大社を参詣後、堺まで出て高野山へ向かう参詣道が大元だと考えられている。また、この道は物品の補給ルートとして利用されることが多く、後に堺を起点として現在に至る。

［中高野街道］

中高野街道は、現在の大阪市平野区から南下して、松原市、堺市美原区、大阪狭山市を経て、河内長野市楠町で西高野街道と合流する全長約十九kmの道である。この街道は、天王寺から直接高野山へ向かうことができるため重宝されたという。

［下高野街道］

下高野街道は、現在の大阪府天王寺区から南に進み、中高野街道と並行する形で大阪狭山市に至る道筋で、大阪狭山市岩室で西高野街道と合流する全長約二十kmの道である。道標が少ないことなどから、他の高野街道よりも重要度は低かったのではないかとされる。

また、河内長野（大阪府河内長野市）から学文路（かむろ）（和歌山県橋本市）までは一本の高野街道となるが、全長は約二十三kmである。

次項においては、東高野街道沿いに残される弘法大師信仰と伝説についてみていきたい。

高野街道　見取図

河内長野市観光協会HPより
http://www.kankou-kawachinagano.jp/blog/2014/08/post-55.html
※高野街道の詳細地図については、大阪府HPに掲載されている「歴史街道ウォーキングマップ」―「東高野街道」「高野街道、西高野街道」が参考になる。
https://www.pref.osaka.lg.jp/doroseibi/kakusyusesaku/rekishikaidou.html（参照2021年11月15日）

三、東高野街道沿いにある弘法大師信仰と伝説

ここで取り扱う東高野街道沿いにある弘法大師信仰・伝説がどれほどの数存在するのかという点については、全体像を把握しえない部分が多く、明確な回答を示すことは困難であるが、各自治体のホームページや歴史資料館等が掲載している情報をもとに調査していくと、少なくとも現存しているものとして次の七か所を挙げることができる。なお、★印は取材を行った箇所である。

・田中井戸（大阪府枚方市出屋敷）

・打上弘法井戸（大阪府寝屋川市）
・国松弘法井戸
・田井弘法井戸
★湯屋が谷弘法井戸
★水呑（みずのみ）地蔵と弘法の霊水（大阪府八尾市）
★照涌大井戸（大阪府四條畷市）

（ここで地図を表記すべきところではあるが、広範囲にわたるため、紙幅の都合上割愛すること、ご容赦いただきたい）

［大阪府枚方市出屋敷　田中井戸（私有地内）］

東高野街道には、水が飲める休憩所がいくつも整備されていたといい、これが「弘法井戸」と呼ばれていたことから、弘法大師信仰と結びつき数々の弘法大師伝説の元になっているともいわれる。一般的には、「弘法井戸」というと、主に弘法大師が関わって湧出した水を湛えた井戸や泉などを意味する。しかしながら、「弘法井戸」の様々な由来をみていくと、水の湧出に関わるだけではなく、言い伝えの中に弘法大師が登場するものは「弘法井戸」と呼ばれていると考えられる。

この田中井戸も弘法大師が水を湧出させたと伝えられる。[4] 大阪府枚方市のＨＰに掲載されている「東高野街道（出屋敷地区）」の解説[5]においては、田中井戸の他に樟葉村の「弘法井戸」と茄子作村の「清水井戸」（いずれも私有地内）についても触れられているが、伝説や場所などの詳細は不明。

［大阪府寝屋川市　弘法井戸（四か所）］

大阪府寝屋川市内には、「弘法井戸」と呼ばれる井戸が四か所（打上・国松・田井・湯屋が谷）存在する。[6]

打上地区の弘法井戸は、「弘法観念水」と刻んだ石柱が建立され、小さな祠の中に石仏が二体祀られている。いくら日照りが続いても涸れることはなかったと言われているが、現在はほぼ枯渇している模様。

国松地区の弘法井戸は、江戸時代の観光ガイドブック「河内名所図会」にも名井として紹介されているという。弘法井戸と呼ばれるに至った経緯は明らかではないが、良質な水が湧出することからそのように呼ばれるようになったのではないかと考えられる。井戸には四体の地蔵尊が祀られているとのこと。

田井地区の弘法井戸は、縦約三m、横約二mあり、寝屋川市の弘法井戸の中で最大規模である。また、次のような弘法大師伝説が残されている。

昔、一人の旅に疲れたお坊さんが村に来ました。一杯の水を求められましたが、どの家からも「この村の水は、金気（かなけ）[7]がひどくて差し上げられないのですよ」と申し訳なさそうに断られました。お坊さんは「この村は飲み水に不自由しているのだな」と村をふり返り、堤の下で杖を突き立てると、清らかな水が湧き出てきました。それから先、この井戸だけは涸れることなく清水が湧き出て、村人は飲み水に不自由しなくなりました。そして、そのお坊さんを人々は「弘法大師」に違いないと信じて、この井戸を誰いうとなく「弘法井戸」とよぶようになりました。（寝屋川市ＨＰの掲載文を一部変更）

郡地区の「湯屋が谷弘法井戸」は、現在も豊富な水が湧出しており、周辺も整備されていることから、平成二十九年（二〇一七年）三月に取材を行った（『生きる力』第八十九号参照）。

ここは通称「ヤガタンの井戸」と呼ばれて親しまれている。この井戸に命名したのが、まさしく弘法大師と伝えられている。

香里園駅から住宅街の狭い坂道を5分ほど歩いていくと、錫杖を手にした大きな弘法大師像が目に入ってくる。大師像の前には、新鮮な花と水、そして線香が供えられており、日常的に管理されていることがわかる。

取材にあたっては、井戸の隣に住んでいらっしゃる方のご厚意で、管理を担当されている方お二人を紹介して頂き、話を伺うことができた。管理当番は二年交代で、日々の掃除や花替え等をしているとのこと。さらに、年一回お盆の時期に、井戸さらい（井戸掃除のこと）もして清潔を保つようにしているという。かつて井戸の裏には竹藪が生い茂っていたそうだが、川口廣次郎さんという大変信仰の篤い方が発起人となり、竹藪を切り拓いて、井戸周りの建物をはじめ、大師堂や大師像を平成十二年五月に修築・建立したという。また、公園も作られ近隣住民の憩いの場となっている。

現在、井戸は事故防止のために囲いがしてあり、横にある蛇口から取水するようになっている。かつては近隣住民の飲料水や米や野菜の共同洗い場として利用されていたが、水道の普及によって、今は防火用水として活用されている。少なくなったとはいえ、今でもこの水を「お大師さまの水」として汲みに来る方がいるとのことであった。寝屋川市教育委員会が設置した案内板によると、この水を使って酒造りを行っていたという話も伝わっている。

［大阪府八尾市　水呑地蔵と弘法の霊水］

大阪府八尾市の「水呑地蔵」と「弘法の霊水」については、先に挙げた寝屋川市郡地区の「湯屋が谷弘法井戸」と併せて平成二十九年三月に取材を行った（『生きる力』第九十号参照）。

↑大師堂

↑弘法井戸

民間信仰においては、お盆に井戸さらいをする理由として、単に井戸水を清潔に保つというだけではなく、死者の魂が井戸を通って帰ってくるので道をつくっておく、という考え方もあるという。

弘法の霊水がある場所は、水呑地蔵もしくはお堂を指して水呑地蔵院と呼ばれ、生駒山地の西麓から十三峠の七曲りの急な坂の途中に存在する。

由来は、弘仁十四年（八二三年）にまで遡り、弘法大師が諸国をまわっているときに、この十三峠を通りかかったことから始まる。その時、通行人たちが喉の渇きから水を探して求めているにも関わらず、山復には水源がなく、困り果てている姿を目にした。そこで弘法大師は、手に持っていた錫杖を岩に突き立て、仏の不可思議な力をこめた。すると、清らかな水が湧きだし、喉の渇きに苦しんでいる人々を救ったという。この水は、大雨のときも濁ることがなく、旱魃のときでも全く涸れることがなかったと伝わる。その後、弘法大師は水を湧出させた場所に地蔵菩薩を刻んで安置し、右側の岩間から流れ出ている水を供えた。そこから「水呑地蔵」と呼ばれるようになったとされる。また、この「水呑地蔵」にお参りをして、水をいただいた人々は病気（主に脚気）がたちまち治ったとされる。[8]

お堂の水呑地蔵院については、壱演という僧侶が創建したと伝えられている。壱演の伝記については不明な点も多いが、弘法大師の十大弟子にも数えられる眞如の高弟とされる。つまり、弘法大師の孫弟子にあたる。一説には、この壱演も弘法大師のように各地を廻って困っている人々を救済したという。[9]

現在、生水を飲むことはできないが、水を沸かして使うということで、大きなタンクを携えて汲みに来ている方もいた。地元の方に話をうかがうと「水呑さん」と親しみを込めて呼ばれていることや生水がそのまま飲めた二、三十年前は遠方からも大勢の方が来ていたこと、また急な勾配を活かしてトレーニングで来る人や夜景を見に訪れる人も多いこと等を教えて頂いた。

↑水呑地蔵院　本堂正面。現在本堂内に祀られている地蔵菩薩像は元禄七（1694年に造立されたものだが、最初に地蔵尊が彫られたのは弘仁十四（八二三）年八月二十四日とされている。

↑「弘法の霊水」湧出口。ここは本堂の右側にあたり、古くからある湧出口。本堂左側にも蛇口のついた湧出口があるが、後代のものという。

［大阪府四條畷市　照涌大井戸］

大阪府四条畷市下田原には、「照涌大井戸」と呼ばれる弘法井戸があり、毎年八月二十五日には「水供養」という法要を執り行っていると知り、平成二十九年（二〇一七年）八月二十五日に取材した（『生きる力』第九十二、九十三号参照）。「照涌」という珍しい名称を持つ井戸であるが、その昔、弘法大師がこの地域を通りかかった際、村の人がこの井戸の水でお茶をさしあげたところ（一説にはお茶ではなく水とも）、大変喜ばれたという。それ以来、どんなに日照りが続いても決してこの井戸の水が涸れることがないということから「照涌」という名前で呼ばれるようになったと伝えられている。井戸のある地区は、小字も「照涌」といい、まさしく井戸を中心として形成された集落といえるであろう。

現在も地域の共同井戸として利用されており、水質保全のため頑強な建屋で囲われ大切にされている。管理は「照涌大井戸保存会」の会員で、近隣住人約六十名で構成されている。日常の清掃に加え、毎年七月の最終日曜日には井戸さらいや周辺の草刈や枝はらい、先にも紹介した通り八月二十五日には「水供養」を行っている。水供養は、この井戸のお蔭で水に不自由なく生活することができるという近隣住民の感謝の念を捧げるために行われている。水供養は、午後四時からはじまり、参加者は約三十名。近くの法元寺（真言宗御室派）からご住職をお迎えし、保存会の会員はもちろんのこと、市長なども参列されていた。その後、お供物のおさがりを頂戴し、近くの下田原集会所に移動。ここで井戸や地域の歴史、弘法大師について学ぶ講演会が開かれた。取材時は、四條畷市立歴史民俗資料館館長の野島稔氏より「照涌大井戸とその周辺の弘法井戸について」と題した講演があり、弘法大師のあゆみに加えて、照涌大井戸を含めた周辺の枚方市や寝屋川市の弘法井戸は全て東高野街道の近くに存在していると地図を示して解説された。「はじめに」でも触れたが、この講演会における野島先生のお話には

大いに驚くとともに、伝説と高野街道という実際に存在するものとが関連付けられたことにより、言い伝えや伝説であると単に一括りにしてはいけないと思うに至った。

また、過去の講演会の様子も写真で示され、参加者からは懐かしむ声があがっていた。終了後は、懇親会が行われ、隣の席になった扇谷（おうぎたに）さんからは「家は照涌大井戸の上にあるが、昔は家に井戸がなかったので、よくお風呂の水汲みをさせられた。坂道を往復するのは大変だったが、足腰が丈夫なのは照涌さんのおかげ」という話や大井戸保存会会長の丸石さんからは子どもの頃の思い出として、大井戸にスイカを冷やしていたこと、午後の休憩時間には茶瓶を持って井戸へ走り、冷たい水を汲んでお祖父さんから順についで回ったこと等をお聞きし、家族の記憶が何代にもわたって照涌大井戸を軸として織りなされていることに深い感銘を受けた。

また、郷土研究家の太田理さんによると、かつては正月の「初水（はつみず）」（新しい力がこもった水）や田植え前の籾（もみ）種（だね）洗いにも大井戸の水が使われていたという。

しかしながら、水質については懸念事項もある。検査を実施したところ、大腸菌や化学物質が検出され、飲み水としては使えなくなってしまったという。詳しい原因は不明だが、水源にあたる方向に下水処理場や廃棄物処理場ができてからではないかとみられる。

丸石さんは、飲用に適さなくなったことで保存会の解散も考えたが、水の有難さを伝承していくためにも思い留まったと話されていた。

今回論文としてまとめるにあたり、取材から三年半が経過しているため、コロナ禍も含め、その後の変化について、照涌大井戸保存会副会長　村川春水さんに電話で取材させていただいた（二〇二一年十一月二十二日）。

村川さんによると毎年八月二十五日の「水供養」は引き続き行われているものの、新型コロナウイルス感染症

の感染拡大状況を鑑みて、役員夫妻の十二名ほどが参加することにし、有志のお参りは遠慮いただいたとのことである。講演会については、五年ほどの間隔で開催することにしたと話されていた。

筆者としては、コロナ禍にあっても照涌大井戸が継続して管理されていることに安堵している。

↑照涌大井戸全景。供物壇の裏側に井戸の取水口がある。井戸を覆う建屋は、三十年前に「照涌大井戸保存会」が結成された時に作られたもの。

←井戸の取水口。奥に石造りの大師像（左）と地蔵菩薩像（右）。取水口は、自然石で枠組みしてあり、深さは約八十センチというが、覗き込むと水量の多さからか、実際よりも深いように感じられる。保存会副会長の村川さんに案内してもらうと、井戸周辺の住宅や畑の脇からも水が湧き出ていた。普段は、落ち葉などが入らないよう木の扉がしてあり、使用する際には、扉を開けて大きな柄杓で水を掬い取る。

四、おわりに

ここまで東高野街道沿いの弘法大師信仰・伝説が残されている箇所について、取材を行ったところを中心に報告と紹介をしてきた。

繰り返しになるが、取材先の選定を行う際、近い場所に弘法大師信仰・伝説が残されており、取材をまとめて行えるので便利と軽率なことを思っていたのだが、照涌大井戸での取材を契機に野島先生から高野街道との関連をお教えいただいたことは、取材方針を決定する上でも大きな幸運であった。さらに、平成二十九年の照涌大井戸での取材については、現地へ赴いてから会長の丸石さんより、ちょうど保存会結成から三十年の記念年にあたっていると教えられ、偶然とはいえ不思議な縁を強く感じた。また、取材の後、丸石さんからお電話をいただき取材のお礼とともに「どうしたら水質を改善できるのだろうか」というご相談をうけた。返答に窮してしまったが、丸石さんとしては先祖代々受け継いできた照涌大井戸の水が飲めなくなってしまったことに大きな責任を感じているということで、聞いているこちらとしても大変胸が苦しくなるお話であった。弘法大師信仰・伝説をいかに保存し、継承していくかについて非常に考えさせられる取材であった。

これまで約五年間取材を行い、調査をしてきた中で実感していることは、弘法大師信仰・伝説については日本各地に数多く存在するものの、管理や保全が継続して行われている箇所は少ないということである。特に、弘法大師を信仰する人々の集まりである「大師講」は高齢化などを理由として解散するところが多く、そのため大師講で管理してきた信仰・伝説の場自体も失われつつあると感じる。せめて取材で赴いた箇所については管理・保全が継承されていって欲しいと願うばかりであるが、万が一途絶してしまった場合でも、取材の記録が継承のた

めのよすがになればという気持ちで続けている。

今後も高野街道沿いの弘法大師信仰・伝説について取材を進め、報告をしたいと考えている。

※論文執筆にあたり、四條畷市立歴史民俗資料館館長の野島稔氏と照涌大井戸保存会副会長の村川春水氏にご協力いただきましたこと、ここに深く感謝申し上げます。

註

（1）ここで、取材方針と取材先の選定方法について触れておきたい。取材方針としては、特定の宗派に偏ることなく、主に一般の方々が主催、管理している場所や祭礼などを対象としている。これは、民間信仰の中にいかに弘法大師が浸透しているかを確認したいという理由からである。取材先の選定方法については、各地に残されている弘法大師信仰・伝説を調べていく際、書籍に掲載されているものを中心にあたっていたのが、年数を経て消失してしまっている例も多かった。そこで、各自治体のホームページや歴史資料館等が掲載している「地域の伝説」に着目し、情報収集する手法に切り替えた。加えて、地域おこし協力隊のブログ等に、その地域独特の風習やお祭りが掲載されることが多いため、丹念に追うようにしている。

（2）『シリーズ河内長野の遺跡9　高野街道』、河内長野市教育員会、二〇一五年、二―三頁

（3）竹鼻康次「南海道（官道）から高野街道へ」『高野街道～河内長野を中心にして』、河内長野市郷土研究会、二〇〇四年、七頁
高野聖と東高野街道との関連については不明な点が多い。そのため、今後の課題としたい。

（4）パナソニック松愛会　枚方北支部のＨＰに「東高野街道と弘法大師伝説」という記事が掲載されている。その中で、田中井戸にまつわる弘法大師伝説が紹介されている。伝説について、枚方市伝承文化保存懇話会発行「ひらかたの昔ばなし・総集編」と枚方市企画部企画調査室発行「枚方風土記」が参考文献として挙げられている。
https://www.shoai.ne.jp/hirakata-n/2021/11/jyouhou-koubouido/（参照二〇二一年十一月二十五日）

（5）https://www.city.hirakata.osaka.jp/cmsfiles/contents/0000002/2911/65637.pdf（参照二〇二一年十一月二十五日）

（6）寝屋川市ＨＰに「文化財」として挙げられている。
https://www.city.neyagawa.osaka.jp/organization_list/kyoiku_shakaikyoiku/bunkasport/bunkazai/namesagasu/1378176994817.html（参照二〇二一年十一月二十五日）
（7）水の中に鉄分が含まれ、においや味が悪いこと。
（8）伝説については、お堂の脇に設置されている案内板を参考にまとめた。
（9）追塩千尋「壱演をめぐる伝承について」『年報新人文学（13）』、北海学園大学大学院文学研究科、二〇一六年

〈キーワード〉
弘法大師　信仰　伝説　高野街道　弘法井戸